

熊野の自然を保護するための幅広い活動

熊野自然保護連絡協議会

会長 中 嶌 章 和

はじめに

1985年4月に発会して以来、熊野の自然保護に関する色々な活動を行って来た。しかし、それらの活動の多くは、今なお継続中で、良い方向に向かいつつあるものもあれば、暗礁に乗り上げたものなど様々である。90年度を中心に本会がどのような活動をおこなってきたかを項目別に報告したい。

「残したい熊野の自然百選」の選定と紹介

本会（通称 熊自連）は、会の起こりが、特定の場所や生物を守る会としてではなく、熊野各地の自然保護に関心のある者がそれぞれの地での自然に関する情報を寄せ合い、必要に応じて協力しあって保護、啓蒙活動を行うというものだった。熊野各地の優れた自然の情報を寄せ合うことから、「残したい熊野の自然百選」構想が生まれた。選定に当たっては百という数字にこだわらない事、当面、本会の会誌「三青」（特集号を含め、年3回発行）に2～3カ所ずつ紹介し、観察会を行って一般の人にも広める事とした。90年度末現在、35カ所の紹介が終った。「50選」あたりをくぎりとして単行本の発行も考えている。

「ふけ田湿地」を保護する活動

和歌山県東牟婁郡本宮町皆地には5800㎡ばかりの細長い休耕田がある。中央を流れる水路の他に、山際から豊富な湧水があり、水田として使っていた時は、腰から時に肩まで泥につかって作業をしたといわれる「深田」の名の通りの湿地になっている。この「ふけ田湿地」に隣接する小学校に熊自連運営委員の一人が勤務中、児童たちと、県下で少ないコサナエ、ヨツボシトンボ、ハッチョウトンボ、モートンイトトンボなど35種に及ぶトンボ類を始め、全国的に少なくなりつつあるタガメ、ゲンゴロウ、オオコオイムシ、ハネナガイナゴなどを次々発見し、県下でも貴重な湿地として関係者の注目を集めていた。熊自連でも「残したい熊野の自然百選」の保護対策重点地として調査、観察会を重ね、地元の方

も草刈りをして観察路の整備をするなど、協力的で「ふけ田」保護の気運が盛り上がりつつあったが、86年10月、「ふけ田」の一部に工事地の廃土による埋め立ての話が起こり、事態は急変した。早速熊自連で地主と話し合い、埋め立てをしない約束を頂いた。しかし、今後また、埋め立ての話が出ないとも限らず、熊自連では、今までの蓄積した調査資料と、今後のふけ田の活用プランをまとめて、89年1月22日、本宮町長に『皆地ふけ田の保護、及びその利用に関する具申書』を提出した。同時に地主の方々へも、具申書の内容を説明し理解を得た。同年5月のトンボを中心とした観察会には200名もの参加者があり、さらに6月には、NHKの「紀伊半島北南」に熊自連と皆地が紹介されるなど、ふけ田への関心が強まった。この様な中、町観光協会、観光課の熱心な協力もあり、町は、90年度にふけ田を地主から借り受け自然公園化する方針を打ち出した。90年7月2日の観察会でも100名を越す参加者で賑わった。熊自連、町観光課の地味な活動が「ふけ田湿地」を大勢の方に理解して頂くために役だった。その後事態は更に好転し、町が「ふけ田」を買い上げる計画を立て、91年度に買い上げを完了する事になった。町は熊自連の提出した具申書に沿って自然公園として「ふけ田」を保護、活用するための第一歩を踏み出した。熊自連は町の要請を受けて、「ふけ田」保存のための具体的なプラン作成に取り組むことになった。今、「ふけ田」のおかれている環境は、陸化が進んでいる湿地をどのようにして沼沢地に還元するか、貴重動植物をどう保護、増殖させるか、人家の下水処理の問題など、難問が目白押しであるが、91～92年度にかけて具対策をたて、手をつけられる所から取り組んで行くこととなった。95年ぐらいまでには、湿地の整備、観察路、資料館、小冊子などが出来、付近の清流、山地を含めた自然公園として本宮町の自然センターとして利用される事となる。

「ハマボウ大群落」を保護する活動

和歌山県那智勝浦町下里の太田川河口と、湯川にハマボウの大群落があり、県下でも、日高川河口に次ぐものである。湯川の群落は「ゆかし瀉」と呼ばれる瀉湖にあり、当面伐採、開発の危惧は無いが、太田川河口のハマボウ群落は、太田川が河口近くで分枝した支流（江川）の兩岸にあり、人家が近くにあるため、下水が混じり、悪臭を放つなど、浚渫、埋め立ての話が以前からあった。本会では、県下有数のハマボウ群落を調査し、その貴重さを知ったが、同時に同地に今は県下的に少なくなったアシハラガニ、チゴガニ、ハマガ

ニの群生も確認し、那智勝浦町へ「ハマボウ、アシハラガニ、チゴガニの群生地」を町の文化財に指定するよう調査資料を添えて陳情した。町長から、「ハマボウは切らない」という約束を得たが、その後、県の河川改修計画、付近住民の無理解が重なり、江川のハマボウはごみを引っ掛けて川の流れをみだすものとして、川の泥浚渫時に大量伐採されてしまった。付近住民にハマボウの貴重さを理解させられないまま、江川のハマボウは最下流部の海水に面する部分の群落を除いて壊滅状態となってしまった。

熊自連では、江川に力を入れていただけないにショックを受けたが、ハマボウを熊野の地から消さない為に、採種、挿し木などによってハマボウを育て、適当な候補地を選び、移植によって新しい「ハマボウの森作り」を計画した。出来るだけ原産地に近い所で、ハマボウの森を作るのを原則としながら、周辺での適地にも積極的に移植を試みる事にした。

さいわい、ハマボウは挿し木、取り木ともに簡単で、すでに会員の手でかなりの苗木を確保している。91年には、第一回目の試みとして、6月中旬、新宮市三輪崎の鈴島に試験移植を考えている。ここにはすでにハマボウが一株あり、花も咲かせており、十分定着するものと思われる。この計画は、新宮市、吉野熊野国立公園管理事務所の了解、協力の下に行われる。この様な移植試験を繰り返しつつ、一般の人に苗木を提供するなどして、ハマボウへの理解を深めて貰い、最終的には、江川のハマボウ復活を望みたい。

「ゆかし潟」の生物調査

和歌山県那智勝浦町湯川の「ゆかし潟」は、県の文豪、佐藤春夫にゆかりのある潟湖で気水性の生物が豊富で、ハマボウの大群落を始め、ハマナツメ、中洲にはフクドウ、ハマサジなどの特徴ある植物相が発達している。

魚類でも、小型のハゼ類の宝庫であり、今後の詳しい調査が必要な地区である。ここが、県の自然公園化と道路拡幅を調和させて整備する計画地となった。県はコンサルタント社に環境調査を依頼し、そのコンサルタント社の間に環境庁が入って下さり、熊自連が環境調査を行うことになった。熊自連では、調査報告の中で、出来るだけ現状を残すよう提言したい。この調査報告は、91年8月にすることになっている。

観察会

観察会は、年6回を目標に行っている。本年度の観察会は次の通りである。

- 6／23 高田のヒメボタル観察会（新宮市）
- 7／8 皆地ふけ田のトンボ観察会（本宮町）
- 10／10 海の漂着物ウォッチング（太地町）
- 10／20 なぞのしし垣を探る（新宮市）
- 11／11 考えよう、浮島の森（新宮市）

浮島の森は、樹木が主構成の特異な「浮島」を形成しており、国の天然記念物にも指定され、大変貴重な文化財であるが、市の施策の遅れや、住民の無理解が重なり、沼沢地が極端にせばめられ、下水の流入、ヘドロの堆積などにより島内の植物群落にも影響が及び、危機の状態にある。89年、浮島調査委員会が出来、ハーモニストファンド審査委員長でもある四手井先生を委員長として、調査、保護対策を進めて来た。この浮島の貴重さを市民にアピールすべく行った。

- 1／20 熊野古道ハイキング（那智勝浦町）

高田のヒメボタル観察会や、皆地ふけ田の観察会は、熊自連発足当時から継続している。

他団体、行政との連携、協力

天神崎保全の陳情署名に協力（天神崎の自然を大切にする会）

自然に親しむ運動に講師派遣（環境庁）

みどりの日記念行事に協力（環境庁）

他会誌に「ふけ田」紹介（和歌山の自然を考える会）

「浮島の森」保存対策要望書に協力（新宮市）

紀伊半島ウミガメ情報交換会に参加（新宮市）

ゆかし瀉生物調査に協力（和歌山県）

その他

会誌「三青」9号、10号、特集号発行

「熊自連ニュース」42～53号発行

3／16 第6回研究発表会

運営委員会は月1回（第1金曜日）

おわりに

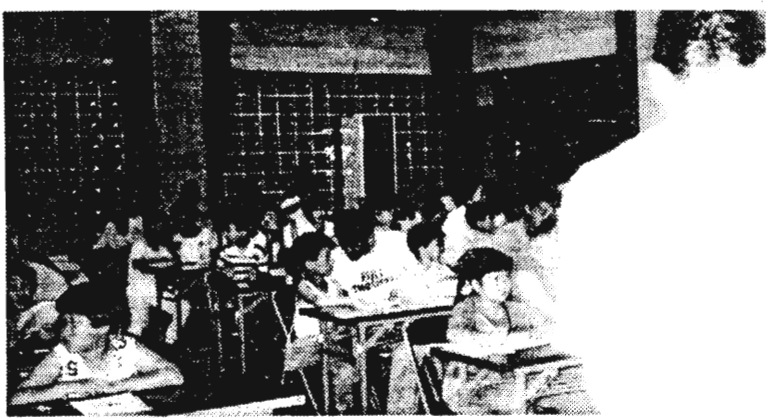
初めに述べた様に、熊自連の活動はすべて継続中である。成果のあがりにくい、息の長い活動を要するものもあれば、明りが見えてきているものもある。「皆地ふけ田」の成果を糧にし、今後も幅広い熊野の自然を子供たちに残すべく頑張りたい。

90.6.28
紀南

親子連れら135人参加

賑わった高田のホタル観察会

新熊野体験研究協会、熊野自然保護連絡協議会主催の「ホタル観察会」は二十三日、高田グリーンランド周辺で親子連れら百三十五人が参加して行われた。指導員は高田中学校の南敏行教諭で、参加者らは、南指導員からヒメボタルの見分け方や高田でホタルの見られる場所や実際に飛んでいる様子などをビデオを使って説明を受けた。このあとグリーンランドから里高田に添って散策、この夜は、ホタルもあまりの人の数にびっくりしたのか数は少なかった。このあと再び里高田の墓地周辺まで散策。子供たちは、旧市内では見られなくなったホタルの乱舞に大はしゃぎしていった。



【南指導員からホタルの種類などについて説明を受ける
(上) 高田周辺を散策 (下)】

1990年6月28日 紀南



「楽園」と買上げます



体長約2センチが国で最も小さなハッチョウトンボや、珍しい水生生物などが多く生息する東牟婁郡本宮町新地(ふけ田)一五八八百八十平方メートルを、町が買上げることにし、このほど十二人いる土地所有者と合意に達した。生き物と融れ合える自然園として整備する。

トンボや水生生物の生息地

自然公園に整備

本宮町、1千万円見込む



珍しいトンボの宝庫「ふけ田」。町有地になってより、細かい保護が図られる。

＝東牟婁郡本宮町新地

「ふけ田」は、数万年以前、中瀬和合(和合)は三種類の生物を保護した。上前には川がたつたしく、九八六年の調査で、採種でその後分岐して湿地になった。わき水があるため田とハッチョウトンボや、二、三年前から休耕田になった。地元の自然保護員二十種を計六百十円を、町が買上げることにし、このほど十二人いる土地所有者と合意に達した。生き物と融れ合える自然園として整備する。

1991年 5月17日 朝日

日 刊 熊 野 新 聞 平成3年(1991)6月19日

ハマボウの森づくり

熊自連が鈴島に苗植える



ハマボウの苗を植える会員ら

「ハマボウキ」とも呼ばれる直徑五センチほどの黄色い花をつける。県内では和歌山市の和歌浦に数戸、民間自然保護団体熊野自然保護連絡協議会(中瀬和合)が、紀南では那智勝浦町の太田川に群生をつくらせている。鈴島に苗三十本を植える。以前は太田川以外紀南地方でも多く見られたが、河川工事や観光開発などで、次第に姿を消した。熊自連では、発足した一九八五年からハマボウの保護を目的として、紀南地方では唯一のハマボウ群生がある那智勝浦町に對して、ハマボウを町指定の天然記念物としてほしいと申し出ていた。この日は、ハマボウが一本自生している鈴島に、熊自連のメンバーや賛同者ら約二十人が集まり、熊自連が高さ五十センチほどに育てたハマボウの苗三十本を植えた。

1991年 6月19日 日刊熊野



太田川河口「江川」のハマボウ観察会



ハマボウ移植の試み

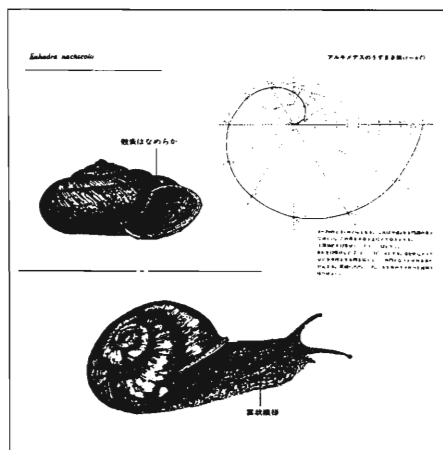


皆地「ふけ田」自然観察会



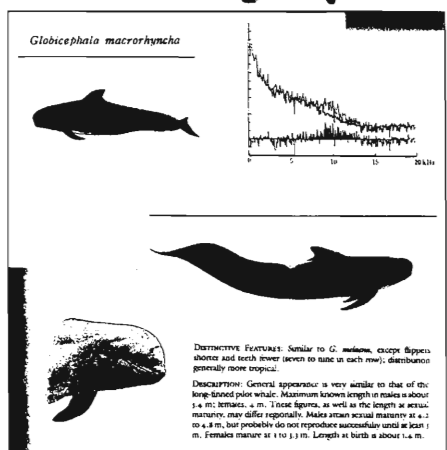
海の漂着物観察会

熊自連 **三青** No.9
1990年6月



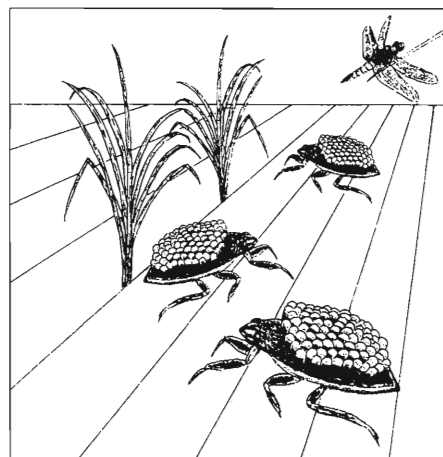
熊野自然保護連絡協議会

熊自連 **三青** No.10
1991年3月



熊野自然保護連絡協議会

熊自連 **三青** No.11
1991年9月



熊野自然保護連絡協議会

熊自連会誌「三青」9、10、11号